

SHOW-HI SVシネマフルーツ

★★★★

マルクス・エンゲルス	
2017年／フランス・ドイツ・ベルギー映画 配給：ハーケ／118分	
2018（平成30）年5月14日鑑賞	シネ・リープル梅田



Data

監督：ラウル・ペック
出演：アウグスト・ディール／シュテファン・コナルスケ／ヴィッキー・クリーブス／オリヴィエ・グルメ／ハンナ・スティール／アレクサンダー・シェア

みどころ

マルクスもエンゲルスも髪もじゃの大人的風格を備えた写真が有名だが、彼らが26歳、24歳の時は？時代は1840年代。舞台は革命前夜のベルリン、パリ、ロンドンだ。ヘーゲルの哲学を「世の中を解釈しただけ」と批判し、次々と著作を世に送り出した2人は、ついに「正義者同盟」の総会に。

そこでマルクスが見せる熱弁と、「正義者同盟」から「共産主義者同盟」への名称変更、「万国の労働者よ、団結せよ！」の新スローガンの採択はお見事だ。そしてついに1848年には『共産党宣言』が出版されることに。

若き日の坂本龍馬や西郷隆盛とも比較しながら、若き日のマルクスとエンゲルスの生きザマをしっかり確認したい。

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■□■マルクス生誕200年！日本では？■□■

カール・マルクスは、1818年5月5日にドイツ南西部のトリアーのユダヤ人弁護士一家の子として生まれたから、今年はその生誕200年。革命理論としての「マルクス主義」も、経済学としての「マルクス経済学」も今の日本では影響力が弱まっているが、それでもなお根強い人気がある。そんな今年5月に、マルクス生誕200年を記念して製作・公開された本作は、平日の昼間の上映にもかかわらず、ほぼ満席。もっとも、その観客はすべて私と同年代のおじさん、おばさん（じいさん、ばあさん？）ばかりで、若い人は一人もいなかったから、それもすごい。

そんな今年、日本では日経新聞5月14日夕刊が、編集委員前田裕之の名前で「マルクス、生誕200年で注目 資本主義とは何かを問う」を掲載した。そこでは「日本でも、

関連する書籍の出版や国際シンポジウムの開催といったイベントが目白押しです。」としたうえで、①東京大学教授の熊野純彦著『マルクス 資本論の哲学』(岩波新書)、②伊藤誠著『入門 資本主義経済』(平凡社新書)の2冊の本を紹介しているが、これはいかにも日経新聞的だ。また、今年12月にはマルクス経済学を基盤とする7つの学会が「マルクス生誕200周年記念国際シンポジウム」を開くそうだから、その成果の発表に注目したい。今どきのマルクスの評価は難しいが、一度じっくり考えてみることが不可欠だ。

他方、後述のように中国ではマルクス生誕200年をめぐる大規模な記念大会が開かれているのに、なぜ日本(共産党)ではそれが開かれないの?それが私には理解できないが、そこにはきっと日本の若者や学生たちの知的のレベルの低下があるはずだ。モリカケで安倍政権を批判するのもいいし、セクハラで高級官僚をやつけるのもいいだろう。また、TOKIOの山口メンバーに集中砲火を浴びせて女子高生擁護の論陣を張るのもいいだろう。しかし、今さら“マルクス坊や”の誕生を期待するわけではないが、少しあはマルクス生誕200年に興味を示してもいいのでは・・・?

しかし、本作冒頭に登場する、「木材窃盗取締法」を巡って有名な論点を提示するシーンをあなたはどう考える?それくらいは、本作を契機に少し勉強してもらいたい。

■□■マルクス生誕200年!中国では?■□■

昨年10月の中国共産党第19回全国代表大会以降、習近平国家主席の独裁体制を強めた中国では、5月5日のマルクス生誕200年を記念して国営メディアは連日マルクス特集を組んだ。また、中国共産党は4日に北京の人民大会堂に党幹部や軍関係者ら約3千人を集めて記念大会を開いた。そこで習近平は「マルクス主義により、東洋の歴史ある大国に史上例をみない発展という奇跡が起きた」と訴えた。以上は5月6日付朝日新聞の記事で客観的かつ率直だが、5月2日付日経新聞「大機小機」の記事は皮肉たっぷりだ。

すなわち、そこではまず第1に、共産党大会での習近平演説は「新時代の中国の特色ある社会主义」を「マルクス主義の中国化の最新の成果」と自賛したが、「マルクス思想の“中国化”とは、はて」と皮肉っている。第2に、海南島の自由貿易港化について、「経済の自由度」で世界トップランクの香港を手本にするのは、「マルクスが葬ろうとした資本主義への逆走か」と皮肉っている。第3に、思想や言論への締め付けの強化について、「ジョージ・オーウェルの小説『1984年』の監視国家さながらだ」と皮肉り、第4に、習近平が言う「中国の夢」とは「中華民族の偉大な復興」というナショナリストイックな夢であり、「『万国の労働者、団結せよ』と訴えたマルクスとは距離がありそうだ」と皮肉っている。そして、最後には『共産党宣言』の起草者がよみがえり、中国を評せば『頼もしい』なのか『おぞましい』なのか」と皮肉っている。なるほど、なるほど・・・。

■□■マルクスはロシア嫌い!するとロシアも?■□■

5月14日付産経新聞「環球異見」は、中国共産党機関紙「人民日報」と国営ロシア新聞に見る対照的なマルクス評価を掲載したが、これはメチャ面白い。中国では、毛沢東の『実践論・矛盾論』や、レーニンの『帝国主義論』が必読文献。そして、党規約や憲法には毛沢東思想、鄧小平理論、重要思想「3つの代表」、科学的発展観、「習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想」とともに、「マルクス・レーニン主義」が指針として盛り込まれている。そして、人民日報の5日付社説では、マルクスについて、「崇高な理想」を胸に抱き「古い世界をひっくり返して、新しい世界を建設するために休むことなく戦った」と賛辞を贈り、「人類社会の発展の法則を提示」したのがマルクス主義であり「世界ばかりでなく、中国も大きく変えた」と称賛した。

それと対照的に、マルクスに冷たいのがロシアだ。国営ロシア新聞では、「マルクスはロシアを徹底的に嫌悪し、ロシアで社会主義革命が起きる可能性はない」と断じていた、との論文を一面トップで掲載した。同論文によれば、マルクスは国々を「工業が発達し、革命が有望である国」と「プロレタリアートに権力奪取の可能性がない他の国」に二分しており、前者に属するのが英仏独米の各国であり、マルクスは特に「英國の拡張」を支持していたそうだ。また、マルクスはロシアを「軽蔑にのみ値する野蛮な国」と考え、「ロシアでプロレタリアート（労働者）革命が起きうるという考えすらなかった」らしい。そして、「レーニンは現代の欧米に通じる“反露主義者”マルクスの革命論を移植し、災厄をもたらした。」これが論文の言わんとしていることだとしているから、ビックリ。本作には、それをハッキリ裏付けるシーンがいくつか登場するので、それをしっかりと確認したい。

■□■ドイツでは賛否両論が分裂！■□■

他方、中国から“友好の証”として、高さ5.5メートルのマルクス像が贈られたドイツでは、5日にその除幕式が行われたが、マルクス像の計画はドイツ国内外で波紋を呼んだらしい。すなわち、新興右派政党「ドイツのための選択肢（A f D）」は「共産主義は多くの人々を殺害したのに、それを正当化してしまう」などと批判し、ネット上で反対デモへの参加を呼びかけた。一方、関連行事に出席したユンケル欧州委員長は「マルクスを理解するためには彼が生きた時代を理解しなければならない。彼は陰謀のためではなく、平等の実現のために力を尽くしたのだ」と功績をたたえた。このように、マルクスの出生地のドイツでは否定と肯定が入り混じり、多彩な評価がなされている。

新聞紙上でも「ウェルト」は、マルクスは「資本主義の活力を過小評価し」、マルクス自身は「よりよい自由な将来のために何もしなかった」と批判しているが、「南ドイツ新聞」はマルクスの理論が「今、再び重要になった」と強調しているそうだ。これらに対して日本共産党の機関誌「赤旗」では今どんな分析を・・・？

■□■26歳と24歳の生意気盛りの青年の弾け方に注目！■□■

マルクスもエンゲルスも、ひげを生やした大人の風格を備えた写真のイメージが強いから、まずは、本作に見る若々しくも生意気盛りのマルクスとエンゲルスの青年像にビックリ！ベルリン大学を卒業した後、ライン新聞の編集長をしていた26歳のマルクスは、「官憲の弾圧に屈するぐらいなら喜んで牢獄に行こう」と宣言。そして、中途半端な論陣（？）を張る少し先輩のヘーゲルやブルードンたちをコテンパンに批判していくから、その言動はキレがよく痛快だ。他方、エンゲルスはイギリスのマンチェスターにある紡績工場のオーナーの息子としてブルジョア的な生活を送りながらも、工場労働者の実態（貧困）についての分析を深め、アイルランド人の女子工員メアリー・バーンズ（ハンナ・スティール）と同志愛的に結ばれていく。マルクスとエンゲルスがパリで再会したのは、1844年8月。互いの論文を批評し合う中で2人の理論は完全に一致し、人間的信頼も深まっていったから、以降エンゲルスはマルクスの経済的パトロンの役割も果たすことになる。

私が本作ではじめて知ったのは、マルクスの妻イエニー（ヴィッキー・クリーパス）は貴族の娘だったこと。そんな2人がなぜ結ばれたのかは本作ではよくわからないが、イエニーのマルクスに対する信頼は相当なものだから、若き日のマルクスの活躍はイエニーの支援によるものが大きいはずだ。坂本龍馬の活躍を描く小説、映画、ドラマはたくさんあるが、私が一番面白かったのは1982年11月16日に日本テレビ放送網で放映された「幕末青春グラフィティ坂本龍馬」。武田鉄也が自ら脚本を書き主演したチョー異色の同作は、現代ドラマ風に仕立てあげられていたうえ、「下士」という下級武士としての坂本龍馬が、ガキ大将のような役割を果たしていたことが痛快に描かれていた。しかして、本作に見る26歳のマルクスと24歳のエンゲルスは、まるでそれと同じ。私自身の25歳前後を考えても、多少のやりすぎや間違いがあっても、若い時はこれでいいのでは？本作では、26歳のマルクスと24歳のエンゲルスの生意気盛りの弾け方に注目！

■□■こんな討議の中で、あの名著が！■□■

マルクスとエンゲルスの共著による「共産党宣言」が出版されたのは1848年。当時のヨーロッパの大団だつた①フランスでは二月革命が、②オーストリア帝国ではウィーンで三月革命が、③ドイツではベルリンで三月革命が、それぞれ起きた年だ。フランスでは1789年のフランス革命後、一時的にナポレオンが皇帝となってスペインやイタリアを含む全ヨーロッパを支配したが、1818年の「ワーテルローの戦い」で失脚。1830年のフランスの七月革命でブルボン王朝は滅亡した。ドイツでは、イギリスから遅れると約100年（正確には80年）の1840年から産業革命が始まったが、資本主義の発展とその矛盾から生まれるはずの革命は如何に・・・？

ヘーゲルの哲学を「世の中を解釈しただけだ」と批判し、実践の必要性を強調するとともに、哲学のみならず経済学の分野でも理論武装を整え、革命思想の体系に邁進するマルクスとエンゲルスは、ついに1848年「共産党宣言」を出版することに。本作のクライ

マックスに向かっては、「一つの妖怪がヨーロッパを歩き回っている。共産主義という妖怪が。」「これまでの全ての社会の歴史は階級闘争の歴史である」等の有名なフレーズが、いかなる共同討議の中で生まれてきたかがリアルに表現されていくので、それに注目！

他方、言うまでもなく「共産党宣言」のラストの文章は「万国のプロレタリアートよ、団結せよ！」だが、そのフレーズは一体いつ、どこで世界の人民が革命に立ち上がるためのスローガンになるの・・・？

■口■「万国の労働者よ、団結せよ！」のスローガンが誕生！■口■

中国語の勉強を��けていると、ヨーロッパ人や中国人に比べて日本人がいかに複数言語に弱いかを痛感させられる。これは長い間、单一民族で狭い島国の中で過ごしてきたせいだ。その点、長い間ゲルマン民族とノルマン民族が対立してきたヨーロッパでは、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語等の言語の共通点が多く、複数言語をしゃべる人も多い。本作を見ていると、「ライン新聞」が廃刊された後、マルクスはベルリンからパリに移住しているし、エンゲルスもイギリスからベルリンやパリに再三やってきている。したがってこの2人は、英語、ドイツ語、フランス語を当然のように操っているし、彼らの批判の対象とされた当時の革命運動のリーダーたちもその点は同じだ。つまり、各国の歴史や現状は違っても、互いを理解し、自分の主張を述べる手段としての言語には共通性があるということだ。

マルクス26歳、エンゲルス24歳の頃、ヨーロッパで最も影響力のある革命組織はヴィルヘルム・ヴァイトリング（アレクサンダー・シェア）率いる「正義者同盟」だ。本作後半からクライマックスにかけては、ロンドンで開催された正義者同盟組織の総会に参加することが許されたマルクスとエンゲルスの活躍が焦点となるので、それに注目！今までこそマルクス、エンゲルスが率いた“共産主義者同盟”が有名だが、本作によると、その名前が生まれたのは、一種のクーデターのような流れによるものらしい。また、この時点での『共産党宣言』は出版されていないが、すでにこの時点では二人は「万国の労働者よ、団結せよ！」という新スローガンを用意していたらしい。そのため、本作のクライマックスとなる正義者同盟の総会の場では、若きマルクスが熱弁を振るう中、次第に彼の主張への拍手と賛同者が増していくことに。そこでマルクスが第1に提案したのが、「正義者同盟」から「共産主義者同盟」への組織名の変更。これが挙手多数で採決された後の第2の提案が新スローガンの採決だ。その採決に至る手腕は、かつて大阪大学法学部の学生自治会の運営に精魂を傾けていた私には、お見事としか言いようがない。もっとも、本作におけるそれはそんなレベルの話ではなく、その後の全世界の共産主義運動に影響を及ぼした歴史的瞬間だから、しっかりと目に焼き付けておきたい。なるほど、「万国の労働者よ、団結せよ！」のスローガンは、こんな流れの中で生まれたわけだ。

2018（平成30）年5月17日記